



平成29年度がスタートしました。学校の教育活動の様子をホームページの他に、新たに学校だよりとして「千葉北NOW」を発行します。よろしくお願いいたします。

平成29年度第1学期始業式 2017/4/6

4月6日(木)に、本校体育館において平成29年度第1学期始業式が行われました。

荻野校長が述べた式辞の一部を紹介します。

(前略)

今日もいつもの「夢」の話。中学校の頃からの「夢」を叶え宇宙開発の仕事をしている植松努さんという方の話です。

植松氏の本業は、リサイクルに使うパワーショベルにつけるマグネットの製造をしている町工場「植松電機」の経営です。二つ目の仕事として宇宙開発をしています。彼の研究所は北海道の真ん中付近の赤平(あかびら)市にあります。趣味ではなく、ロケットも人工衛星も造っています。何よりも世界に3カ所しかない「無重力実験施設」を持っていて、世界中から研究者が実験に訪れます。最近では、NASAからも実験にやってきます。社会に貢献している立派な仕事をしている人物です。

赤松氏が小学生の頃、自分の「夢」を作文に書いたとき、「出来もしないことを書くな」と先生に叱られたそうです。大人たちからも宇宙の話をする「現実を見なさい」「どうせ無理なんだから」と言われたということです。少年は素直にその言葉を受け止め、やがて、父親の経営する植松電機を継ぎ成功するが、彼の心は満たされなかったそうです。ある少年との出来事をきっかけに、幼少期に大人に言われた「どうせ無理」の言葉を思い出したそうです。この言葉を世界から無くすために再び宇宙開発という「夢」を追い始めます。同時期に同じ「夢」を持つ北海道大学の永田教授と意気投合し、見事に宇宙開発の仕事に軌道に乗せ現在に至ります。

植松氏は、『「夢」は、好きなことで、仕事は人や社会に役立つこと。好きなことが仕事になると幸せだが、みんながそうなれるとは限りません。「夢」＝「仕事」と考えてしまうと挫折しなければならぬ人が多くなってしまいます。たとえば、「人の命を救いたい」という夢を抱く人が、一つの仕事「医師」にならなければならないという発想だと、実現できる人はごく少数に限られるかもしれないが、2つ目の仕事として、ボランティアやカウンセリングなど医師とは別の「夢」を追うことができるのではないかと、だから子どもの「夢」をつぶしてはならないのです。』と語っています。

植松氏の話をして「夢」に対応する仕事の幅を広げることも一つの方法ではないかと思いました。「人の命を救いたい」という「夢」には、医師以外にも「看護師」「救命士」「カウンセラー」「警察官」「薬剤師」広く考えれば、「教師」等多くの仕事が考えられます。「夢」はいくつあってもいいのですから。

私が植松氏の講演を拝聴したのはごく最近のことです。「夢」や「仕事」に向けて、前向きになれるお話をたくさん伺い、彼の著書「NASAより宇宙に近い町工場」も拝読しました。勇気の出る言葉に付箋をつけていたらこんなにもたくさんになってしまいました。現在、北高の図書室にはこの本はまだありません。今後購入をしてもらう予定です。見かけたら手に取って、皆さんも勇気ももらってください。



式辞を述べる荻野校長